

国際シンポジウム

「留学」が世界にもたらすもの

——関係性、アイデンティティ、共生

日程：2006年7月17日（日）

主催：独立行政法人日本学生支援機構／

国士舘大学大学院グローバルアジア研究科・

国士舘大学アジア・日本研究センター

場所：東京国際交流館プラザ平成（国際研究交流大学村）

イシエングル・ボルジュロフ（キルギス共和国、政治学者）

「留学——新しい視点を求めて」

本日は、教育の持っている問題、課題などをお話したいと思っております。かつて教育大臣を務めた経験から、私は社会的な問題にも携わってきました。そのなかから留学ということ、それがもたらす影響、また近代化のなかでの影響に触れていきたいと思えます。

21世紀は、社会が分極化し、貧しい者と富める者の格差がひろがった、新たな挑戦と脅威の時代です。そして世界的な環境の危機、天然自然資源の枯渇という問題もでてきました。それにともなって、失業や過激主義、テロリズムや非合法での移住などが起こっております。現在、人類にとって重要な問題のひとつは、思想家で人文学者のテイヤール・ド・シャルダンやベルナール・スティグレールが提唱した、テクノクラシーという技術主義的な文明から、ヌー・スフィアという精神の文明への移行です。教育は人類のゆるぎない発展の土台であり、現代の挑戦と脅威に適切な対策を投じることができます。グローバル化が進むことによって、全地球的教育の空間を作るという可能性があらわれました。精神圏、ヌー・スフィアでは、人類が数千年にわたって培ってきた価値のあるものを保存し、創造的なイノベーションを行い、人間界や自然界の法則や知識を授かることができます。

教育はテロリズムなどの社会現象と戦う手段でもあります。キルギスは、ソビエト時代を経て、東西南北のコミュニケーションを繋ぐ交差点となりつつあります。つまり文明の対話や対決の場にもなるのです。ソビエト崩壊後、経済的・社会的に深刻な危機を経験し、社会的な達成から後退した面もありましたが、私どもキルギスは大きな潜在能力として教育の質を上げることに尽力してまいりました。このプロセスから、民主主義が必要であり、市場経済に一致した教育、世界標準にあった教育でなければならないということが分かってまいりました。教育の改革は、現在の世界的な現象と言えます。1990年からのキルギス社会の移行期では、早急に解決すべき問題として、教育を受ける機会の均等化、質の向上、人材の有効活用及び適切な管理があげられています。これは新しい政治経済の目標をかかげた他のCISの国々とも共通のものであります。

キルギスの留学の歴史は長く、今のキルギスの知識人の大部分が旧ソ連の集権的な教育機関で教育を受けています。そして独立後、様々な分野で指導をするようになりました。したがって留学は、国の職業的なインテリ層を育成したと言えるでしょう。今は知識欲を満たすためや、特定の地域の地理やメンタリティ、そして国にとって必要な専門分野を学ぶべく、多くの人たちが留学しています。国としては「21世紀の人材育成開発大統領プログラム」などを通じ、支援しています。

キルギスでは、国際協力をさらに強化し、世界の教育機関と統合させるために、旧ソ連諸国及び各国との協定や法的基盤の拡大強化、公的な条件を作り出すメカニズムや資金の開発、外国人学生の誘致や教育の国際交流に努めることに決めました。高等教育国際化の重要なコンポーネントは、教師陣の移動があげられます。客員教授制度の普及により、特に若い世代の教師達は、外国語を習得し、国際研究プロジェクトに参加するようになりました。また、カリキュラムの国際化も重要な課題です。専門教育プロセスでは、国際機関によって設定された基準に見合ったカリキュラムへと見直しが図られています。私が「外国に行かずに留学するやり方」と呼んでいる、国内にある外国の大学支部で学ぶなど、教育プランの拡大・国際化が、特に市場経済への移行経済圏で見られます。他にも、ビジネス組織や高等教育機関、政府などの参加する、国境を越えたグローバルアライアンスの GATE などによって、国外の教育プログラムにおける質の保証や認定が行われています。

こういった国際教育を支持する人々は、上に述べたような形態が複雑な国内教育制度の国際化や国際教育というものへの統合のワンステップだと考えています。ばらつきは、経済的なグローバリゼーションをも左右しかねないと考えているのです。国際標準化においては、例えば学部や大学院のプログラムは英国や米国をモデルに統一されつつあるといえます。

また、質のレベルの保証という面においては、きちんと技能をもち、教育を受けた人たちを審査する高等教育機関、そして教育のクオリティマネージメントを担当する機関が必要になってきています。キルギスの大学の多くは、既にそれぞれの認定を行う連合を作っています。現在の根本的な課題は、国際化のプロセスを含みながら、教育の新しい質に適切であり、かつキルギスの市民社会構築プロセスや独自の伝統とかけ離れていない教育システムの発展方法を模索することです。

留学ということが、変化や新しいことにオープンな才能ある若い世代の、批判的かつ客観的に物事を見る力を養うのであれば、それが労働市場で自己の競争力と価値を高めることにつながります。そして将来は、国の管理職、科学技術やビジネスのエリートとなっていくわけです。そういった留学生に不可欠な資質は、国民としての確固とした意識、人生への明確なビジョンです。キルギスは、人的資本発展モデルとして留学した若い人たちを、どうすれば一番いい形で国のために活用していけるかを考えなくてはなりません。そういう意味では、自分たちの歴史の中で非常に困難な時期に、外国に若者を留学に出した日本をモデルにしたいと考えております。

村井吉敬（上智大学外国語学部教授、同アジア文化研究所所長）

「私の留学体験とその後」

私の留学した 1970 年代の半ば頃、日本人が留学するといえば欧米、つまり周縁から中心へ行くのが通常でした。それ以降私は、20 年も 30 年も、日本の社会よりも濃密にインドネシアと付き合いつづけています。その契機が留学だったことを考えると、生き方そのものを規定したのは留学だったと言えるでしょう。

私がアジアに関心を持ったのは、アフリカと同様に新しく独立した国ばかりがあり、非常に輝かしい未来を感じたのです。留学先であるインドネシアのバントンでは、1955 年に第一回アジア・アフリカ会議がひらかれ、スカルノ大統領など名だたる指導者があつまりました。60 年代とは一方でアメリカがベトナム戦争を本格化した時期でもあり、日本では大学の管理体制をめぐった全共闘運動もありました。インドネシアについて直接的な関心を持ったのは、1965 年 9 月 30 日に、インドネシア共産党が一気に

崩壊する事件がおきたからです。その時私は、「希望の星」アジア・アフリカはどうなってしまうのかと不安を感じました。

普通留学というと、自己のキャリアアップや国家のレベルアップ、グローバル化にあわせた国づくりのために先進諸国から技術や知識を学ぶというのが大体です。けれども私はその意識が殆どありませんでした。博士課程が修了しかけ、それからのことを考えたとき、文部省のアジア諸国派遣留学生制度に応募しました。インドネシアはその年はじめて渡航の対象になったところで、私はそこに受かったのです。アジア連帯というのがひとつの大事な価値だと考えていたこともあります。さらに、経済学と社会学を勉強したこともあり、イスラームと資本主義、経済発展をひとつの大きなテーマとして捉えようとしていました。個人的な動機には、日本社会がいやだというよこしまなものもありました。さらに、蝶の収集家だった私は、インドネシア東部のみに生息するトリバネアゲハを採ってみたいと望んでいたのです。

インドネシアに行く前には、インドネシア研究会などに不定期に出席し、文化や言葉などを勉強しました。そのなかでサルビニ・スマウィナタという経済学者の書いた「中間技術論」を紹介され、読みました。それに影響されて、インドネシアの開発は、先進国をモデルにしたキャッチアップ論ではいけないのではないかという思いを抱き始めました。

バントンでは、パジャジャラン大学に籍を置いていましたが、良家の子女ばかりでありあまりにおもしろくない。社会に入り込もうと、家の周りから街中、田舎など様々なところに行っていました。それはとても濃い体験だったと、今も思っています。とくにアジア・アフリカ会議の会場だった場所に行ったときには、何もなく、国家の変質を実感しました。会議から 20 年後のことです。反植民地主義の会議場だったのに、それだけの時間があると、植民地主義国家にもなりうるのかと思ったのです。

インドネシア渡航前に読んだ本は、何の役にも立ちませんでした。正しい歴史書や教養・知識溢れたガイドブックなど、生活するには無用です。インドネシアだけでなく、発展途上国や新興独立国の歴史は、「正しい民主主義」として描かれています。バントンの住民の半分くらいは、三輪タクシーのベチャ屋などインフォーマルセクターの労働者で、決してガイドブックには出てきません。しかしそのような社会の「表舞台」とは無縁な人々が営む普通の暮らしから政治や経済、国際関係を見ないと、そこで暮らす意味はないと思ったわけです。多様性に満ちた文化がひとつの国家にまとまるとき、どこかに無理が出る。今もそうですが、それを一民族主義で括ってしまうと、さらに無理があります。インドネシアで暮らしたことによって私は、国家や民族そのものを疑うという価値を学びました。それはとても意味のあることだと考えています。

政府高官など国を作ったエリートと人々の間に絶望的なまでに大きな距離感がありました。アカデミズムが書いてこなかった、そういった側面を日々実感しました。インフォーマルセクター、「民衆生業」の大切さ、その価値に私は気がついたのです。権力から阻害されている。けれどこびない。こういった例は、日本の「フーテンの寅さん」や魯迅の「阿 Q」など、どこにでもみられるのではないのでしょうか。留学によって私は、どこでも人は生きている。ぎりぎり人は食えなくても生きていかなきゃいけない。つらくても逃げられない、あるいは逃げない。あたり前のようなことですが、そういったことを教わりました。正義や革命という正しい歴史を支えている人ではなく、いわゆる普通の人民である民衆に私は勇気付けられました。したがって今も、国家や民族というものをあまりに過大に言うことに対しては、疑問を持ちつづけています。